

強者の戦略

【解答例】

パウロは、「信仰によってのみ義とされる」とする信仰義認説を説き、ルターは、この考えを徹底した。ここでは、人間はその善行により救われるのではないとし、「信仰」の重要性が説かれている。また、親鸞は、絶対他力の考えから、念仏を自らの力によるものとせず、阿弥陀仏から賜る「信心」の重要性を説いた。キリスト教では、人間は生まれながらにして背負っている罪として原罪が説かれ、その救いは神の愛（アガペー）によるものとし、浄土真宗では、人間とは煩惱に染まる者として、これを悪人としたうえで、阿弥陀仏の救いの対象が、この悪人であり、悪人は、自らの力では救われないという自覚から、阿弥陀仏の救済を信じることで必ず救われる、すなわち悪人こそが救われる教を説かれている。つまりは、キリスト教・浄土真宗ともに、人間の生命からは切り離すことのできない「原罪」「煩惱」のままに救われる道が説かれている点が共通している。(398字)

解説

まず、問題の趣旨を整理することから始めてみましょう。

- 1.キリスト教の「罪」：「原罪」
- 2.浄土真宗の「悪」：「煩惱」

つまり、法にふれ、法を犯すというところの「罪（犯罪）」や、一般的な「善悪」に基づく「悪」という意味ではないというところが入口になります。

「原罪」とは、我々の先祖であるアダムとイブが、食べてはならないとされていた禁断の果実を口にし、神を裏切ったとされることからくる「罪」を表しています。また、「煩惱」とは「欲望」の

ことを表し、親鸞は、阿弥陀仏により「煩惱を断たずして涅槃に入る」ことができる、と説いています。つまり「煩惱」は、なくそうと思ってもなくすることができない、切り離すことができない、「煩惱」に手足をつけたものが人間である、という自覚が、親鸞にはあったと考えられます。このあたりは、親鸞の独特の考え、受け取り方を感じることができます。なぜなら、通常は、心を清浄に保ち＝「煩惱」を断ち切り、悟りの境地に至る、と考えるのが普通であるところを、断つ必要がない、と開き直りに似たような境地であるからです。

さて、次に、問題文におけるヒントを探してみましょう。わざわざ「信仰義認説」という表記があるのにはそれなりの訳（意味）があるのではないかと考えてみた時、このキリスト教で言われるところの「信仰」に対応する、浄土真宗の「信心」に気づくことができれば、文章の伸び、記述の深み、比較・対比が際立つこととなるでしょう。

つまりキリスト教（パウロ・ルターのプロテスタントにおける見解）でも、浄土真宗でも、自らの善い行い（≒自力）で救われるのではなく、「信じる」ことにより救われる、ただ「信じる」のみである、とすることを説いている共通点を発見することができます。両者の「信じる」は、こちら側が「信じる」という受け取り方ではなく、向こう（神・阿弥陀仏）の方から、「信じる」ようにさせられる、という受け取り方となり、「信じる」ということ自体が、目には見えない大きな力のはたらき（親鸞の場合は、これを「絶対他力」と呼ぶ内容）を受け止めている点が共通点となります。

あとは、問題文にあった「信仰義認説」そのものの説明、及び「悪人正機説」そのものの意味をきっちりと表現することで、文章全体が締まり、問題の設定条件に沿う論述となるでしょう。

強者の戦略

ただ、やや難解なのは「悪人正機説」の方で、よくいわれるところの唯円の『歎異抄（鈔）』の中にみられる言葉「善人なおもちて往生をとぐ、いわんや悪人をや（善人でさえ救われるのだから、悪人はなおのこと、必ず救われる）」の意味がわかりにくい、と感じる人がいると思いますが、これは、「善人」＝自分の力で悟ることができるとうぬぼれている者、「悪人」＝自分の力で悟ることができないと自覚している者、と置き換えてみて考えるようにしてください。「悪人」＝自覚している者は、自覚している分、何とか救ってほしいという思いから、阿弥陀にすがることでしょう。だから、阿弥陀仏は、うぬぼれている者でさえ、漏らさず救ってくれるのだから、自覚している者は絶対に救ってくれる、という解釈になります。

いや、まだ、理解しづらいということでしたら、阿弥陀仏を、「おせっかいな、面倒見のよい母親」と置き換えてみてください。自分の力で悟ることができないと自覚している悪人は、「自分では、片づけることもできない、着替えもできない、と認めている子ども」さながらです。母親は、このどうしようもない子どもをまず助けてやりたいと思うもの。だからこそ、親鸞は、悪人こそが救われる＝悪人正機と説いた訳です。

いやあ、なかなか重いテーマでしたね。お読みいただいた皆さんの、ここまでのお付き合いに感謝するとともに、本年度の公民、閉じたいと思います。デハマタアウヒマデ